

## 平戸藩の価値を阻む壁を乗り越えよう

黒田 成彦

地域の魅力や活力となる資源の一つに「歴史」があります。私たちの故郷平戸市は、大陸との交流の窓口として、歴史の節目でその存在感を示しています。特に、平戸松浦家はその最盛期に版図として所有していた領地は、北は壱岐市、東は松浦市今福町、西は小値賀町と五島列島の一部、南は佐世保市針尾島までと現在の県境や自治体の垣根を超えた広い範囲を誇っていました。

例えば、佐世保市の中心部に所在する「松浦町」は松浦家の私有地でもありましたし、夜の繁華街の「山県町」は、平戸松浦家の官僚で生月町出身の山縣家が干拓事業によって整備した土地です。それらは、私有財産として位置づけられているので、ここでは取り上げませんが、私自身が標題に掲げた「壁」として感じているのは、文化行政としての「平戸八景」と産業振興行政としての「三川内焼」の存在です。

「平戸八景」は、平戸藩第十代藩主の松浦熙公が、長崎勤番の際に往来した平戸往還（平戸街道）周辺に所在する八か所の風景地を選んだスポットです。具体的には、江迎町の「高岩」と「潜龍水」、小佐々町の「大悲観」、吉井町の「石橋（御橋観音）」、佐世保市瀬戸越町の「眼鏡石」、同高梨町の「岩屋宮」、同福石町の「福石山（福石観音）」、早岐瀬戸の「潮え目」の八か所です。これら八景は「独特の樹叢（じゅそう）・地形から成る一体の風致景観は、日本人の風景感の大きな影響を与えた八景の発展・定義の過程を示し、鑑賞上の価値及び学術上の価値が高い」として平成 28 年度までに国の名勝に指定されています。

ここで課題が二つ浮かび上がります。一つは、そうした貴重な文化的財産ともいえる「平戸八景」について、平戸市民はこれを熟知して日頃よりその価値を共有していると言えるのかという疑問。またもう一つは、佐世保市の文化財行政ご当局は、「平戸」という名前がついていることによって、その価値の宣伝や活用が消極的になってはいないかという疑問です。例えば、ふるさと教育を推進する上で、平戸の小中学生がこうした八景を巡る研修など聞いたことがありません。さらに平戸市と佐世保市の観光関係者が連携してこうしたスポットを巡る旅行商品を造成したという話も聞いたことがこれまでにあったでしょうか。

これに加えて前述した「三川内焼」への産業振興としての施策にもすれ違いのような温度差を感じます。私は先日、こうした温度差を解消したいという気持ちが湧いてきて、窯元の代表の方々と意見交換をすることができました。二回にわたって開催された意見交換会でしたが、浮かび上がってきた課題は、輸出戦略において従来からの「平戸焼」でPRしたほうが欧州向けに効果的なのに対して、佐世保市行政としては「三川内焼ブランド」を確立して欲しいという思いがあるようです。この点も、「平戸八景」と同じ理由で、佐世保市行政ご当局が「平戸」という地名を敬遠しているような感じがします。

つまり佐世保市行政のお立場は、市民からお預かりしている貴重な税金を支出し、地元の産業振興や活性化につなげたいという使命感がありますが、そのことが受け取り方

によっては隣の自治体の宣伝や振興策として利用されないかという懸念です。私が思うに、こうした考え方は正しいのですが、そのことが本来の歴史的価値の発信や共有を阻む「行政の壁」になってはいないかということです。しかしその一方で見方を変えれば、平戸市の予算や事業によって、三川内焼の産業振興を推進するというのも筋違いのような気がします。私自身も平戸市側から見た同様の「壁」を感じるのも事実です。

そこで、前回二回目の意見交換で出された一つのアイディアを申し上げます。

それは直接的に三川内焼の振興を共同で行うということではなく、陶磁器がその価値を発揮する「器」としての能力を発揮できるイベントの開催です。その時提案されたアイデアは、「殿様気分で味わう地酒の魅力プロジェクト（仮称）」です。

現在、平戸市内には日本酒の蔵元が2社存在します。また佐世保市内にも2社ありますが、江迎の潜龍酒造株式会社は、松浦藩御用達の蔵元であり、会社が所有する建物や庭は「本陣屋敷」と呼ばれ、長崎県指定史跡にもなっています。

従って、この3社による酒のイベントを平戸市と佐世保市で共催して、その時の器を「三川内焼」で味わうという企画です。両市は、それぞれの酒造元を応援する形で事業をプロデュースし、そこに三川内焼の窯元さんたちも加わって、相乗効果を上げていくという仕組みです。

すでに長崎県内の酒造メーカーは、これまで幾つものイベントを通じて、民間主導により県内の日本酒の魅力を発信し続けています。ここに改めて、平戸藩の歴史の魅力などを「殿様が味わったお酒」としての付加価値を増幅させ、また器としての三川内焼の魅力を加えることで、歴史の魅力が大きく強く広がる可能性を帯びてきます。そしてさらにお酒を味わう空間を演出する目的として生け花や掛け軸、お庭などの伝統文化を相乗効果として発信していくことは、令和7年度に開催される国民総文祭に向けても大いなる意義が見いだせると確信します。

これからの地域振興は、自治体の垣根を越えて、共通の歴史や風土、自然を通じて繋がり会い相乗効果を導き出すことによって、お互いがハッピーになれる企画が必要となってくると思います。さらに行政だけではなく、民間企業との連携を強化し、このようなイベントが実現できることを大いに期待しています。

おわり